

春水にうつりて飛べる煙かな 泊月

池でも川でもよい。春の水がある。何の煙かわからないが一筋の煙が水に映っている。「飛べる」という言葉から風の勢いと煙の速さを感じられる。ある程度太い煙だろう。水、風、煙という三つの要素しかない単純な風景だ。空白だらけの俳句である。しかし、「春水」、「飛べる」、「煙」という言葉のニュアンスを汲み取るならば、その空白に春の光と春の大気が満ちていることが感じられよう。

春水の上の障子のあきにけり 泊月

たとえば川に張り出した料理屋の座敷のような場所を思い浮かべる。「春水」と「障子」以外は、空白として読み手の想像に委ねられている。この句も春の光に溢れている。俳句の宿命は言葉が少ないことだ。この宿命を積極的に活かそうとすれば、冗舌であるよりも寡黙なことによって読み手の想像を刺激する、そういう青葉の選び方・並べ方をしなければならない。高浜虚子が寄せた『比叢』の序によれば、泊月の志した俳句は、「一寸見たところでは平凡なやうだが味はへば味はふほど趣きの深い句」であり、「技巧のうまさ誰にでも認められるやうな句」や「苦心の跡の見えるやうな句」ではなく、「底力のある句、深く光の包まれた句」だという。

この言葉は精神論のようにも聞こえるが、俳句の表現のコツを掴んだ言葉だと受け止めたい。短い言葉で何かを表現しようとするならば、奇抜な言い方よりも、平凡な言い方のほうが訴える力が強い。短い俳句には凝った表現は向かない。むしろ、季語と定型を活かしながら、当たり前という言葉であっさり表現する方が効果的なのだ。泊月の悠揚迫らない句風の背景には、俳句という詩の特性に対する理解と、それを踏まえた彼なりの表現上の計算があったのだろう。

すさまじく煙とびゆく桜かな 泊月

の「すさまじく」という形容と、「春水にうつりて飛べる煙かな」の「うつりて飛べる」という一見無技巧な描写とを比べると、後者の方が明らかに的確だ。平凡を恐れない泊月の作風の前提には、「目立つ技巧を凝らさずとも、平凡に書かれた俳句のもつ本当の良さはわかってもらえるはずだ」という安心感、すなわち彼の句の選者である高浜虚子に対する信頼感があったのだろう。以下、佳句を挙げよう。

洗ひたる遍路の杖を床の間に 泊月  
うらうらと野山につゞく遍路かな "

一句目は目敏いスケッチ。「野山につゞく」は、幾人もの巡礼が列をなしてつらなる風景の広がりを表現している。

水際の石の上なる雲雀籠 泊月

雲雀籠が水際の石の上に置いてある。「水」「石」「雲雀籠」という三つの物が明るい春の風景を構成している。

水禽の鳴きつゝ泳ぐ花篝 泊月

花篝は夜桜のために燃やす篝火。夜の情景だ。夜の川を水鳥が鳴きながら泳いでいる。鳥の種類を明示せず、漠然と「水禽」といったところが巧い。写生とは事実の忠実な再現ではない。むしろ、夜の暗がりに水鳥らしきものが居るということが、実際に人の目に映る正直な印象だ。よく見ると泳いでいるようでもあり、鳴く声も聞こえる。それを「鳴きつゝ泳ぐ」と詠んだ。平凡なようで確かな表現だ。

率然と藪の中より花吹雪 泊月

「率然」とは突然の意。藪の奥に桜が咲いていて、ふとした風に加減によって藪の中から落花が吹かれて来た。奥行のある情景と微妙な動きを簡潔に表現している。

秋風に倒れしもののひゞきかな 泊月

おや、何かが風に倒れた音らしい。そんな経験は誰にも覚えがあろう。それを「倒れしもののひゞきかな」と詠んだ。秋風の中から、乾いて澄んだ物音が響いて来る。

黒板のはしにさがれる烏瓜 泊月

黒板の端に烏瓜の蔓がぶら下がっている。田舎の小学校らしい情景。いかにもありそうだが、新鮮な光景だ。

鐘楼に茸籠置いてくたぶれし 泊月

茸を入れた籠を置いて休んでいる。その場所が鐘楼だということに現場の事実に根ざした面白さがある。「くたぶれし」という口吻にも実感がある。

買物の妻に出逢ひぬ年の暮 泊月

年の暮で妻は買物に出ていた。その妻にばったり出くわした、という巧まざるユーモア。

この他『比叡』の佳句をあげておこう。

南に花すこしある紀三井寺

蓑を着て舟の支度や花の下

老の手のふるへて灯す燈籠かな

高波を躍り越えたる燈籠かな

舟ばたによりし燈籠を覗きけり

水の上に置いて灯せる燈籠かな

進みゆく軸に焚ける蚊遣かな

屋根の上に人現れし野分かな

たれかれの写真の下に冬籠

笹鳴をまねつゝ急ぐ法師かな

水鳥や夜は闇近く浮きつれて

叙法は平凡に見えるが、一句一句の情景は確かな輪郭で描かれている。「屋根の上に人現れし」の「人」や「たれかれの写真の下に冬籠」の「たれかれ」など、内容を限定せず空白の部分を多く残した表現は、かえって読み手の自由な想像を促す。それによって、俳句という小さな詩は、読み手の心の中で大きく膨らむのである。